
ポケモンTHEクロニクル

月夜魅 美闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンTHEクロニクル

【Nコード】

N5940Y

【作者名】

月夜魅 美閻

【あらすじ】

突如現れた異形の存在、悪魔……。悪魔から世界を守るため、デッドバスターとなったポケモン達が立ち向かう！！

どうも。作者です。機能使い慣れてないためたまにミスった状態で上げるかもしれません（汗）だから、物語を行ったり来たりする可能性が十分にあります。ごめんなさい（泣）

序章前編：始マリノ刻

この世界には、二つの種族が存在する。

一つは、ポケットモンスター。彼等は、自らを魔獣と称したりする。地下都市アンダーワールドで暮らし、もうひとつの種族から身を守っている。

その種族が、悪魔と呼ばれる異形の存在。ポケモンを喰い、無限に成長し続ける魔物だ。

マザーコアと呼ばれる母体がいるらしいが、何処にいるかわからない。

この物語は、デッドバスターと呼ばれるポケモン達の記録。クロニクル

セイコク

成國 二〇二七年

地下都市、アンダーワールド。悪魔から身を隠して暮らす、ありとあらゆるポケモン達が住む世界。

東西南北の地区があり、ポケモン達はパレットと呼ばれる家で生活をしている。破れた衣と棒で作ったテント、石を積み上げて作ったモノ……。種類は様々。

全部で四つの地区は、四のブースに区切られている。かつて、外界にあった国と同じ数十七になるように。統治者である王の元、平和が保たれている。そんなアンダーワールドには、秘密組織と言うべき存在が……。

西地区 第四ブース

「……………」

右腕に包帯を巻いた漆黒のポケモン……ダークライ。彼はここの王で、闇の国という場所を納めていた。誰よりも純粹で優しい心を持ち、各国からも指示を得ている存在。

高台にいる彼が見つめる先には、十七人のポケモン。地面に座り、頭に機械ヘルメットを付けて眠っている。

彼等はデッドバスターと呼ばれている、特別な存在。悪魔の血を取り込み、悪魔ポケモンと化した……悲劇の戦士。世界を悪魔から守る為、自らこの道を選んだ者達だ。

3

「イメージトレーニング終了!!!全員ヘルメットを外せ!!!」

ダークライの号令で、戦士達は一斉に目覚める。

「次は武器のメンテナンスだな……。呼び出された順番に、ラルク博士の研究所へ。」

「はい!」

デッドバスターについて、少しお話ししましょう。

デッドバスターになるには、悪魔の血を受け入れる……つまりは、適合者でなければならぬ。ただ思いが強いだけでは駄目なのだ。悪魔化すると、ポケモンの力と悪魔の力が合わさり更に強力な技を身につけることができる。そんなポケモン達が、デッドバスターとして活躍するのだ。

デッドバスターになると、体内に寄生兵器を宿すことになる。予め武器のオーダーを取るから、戦士達は安心して体を預けられる。その相手が……。

「いらつしゃ〜アイ 三ヶ月に一回のメンテナンスよ〜ん」

「相変わらず……ですね。ラルク博士。」

ランクルスのラルク博士。会話をしている戦士は、ゾロアーク。悪魔化している為、本来赤い部分が黒銀に染まっていた。鬘は、磨いた鉄のように美しく輝いている。

「ささ！座って座って」

「はい。」

「えっと……。カルマくんだね？武器はクリスタルの鎌。」

パソコンを片手に、ラルク博士はカルマと面談。武器の調子や、悪魔と戦っている最中に不具合がなかったか、破損はしたか等々。メンテナンスに必要な情報を集めていく。

「あ、お兄さん元気？弟くんは？三人兄弟なんだよねえ」

「博士、脱線してる場合ですか？」

「おっと！つつい……。さて、とくに異常は無いみたいだから……バックアップだけにしようか。君はいつも無茶をするらしいからね。誰かさんみたいに。」

付き添いで来ているダークライをチラ見し、ラルク博士は準備にかかる。当のダークライはというと、苦笑いするしかなかった。

「みんなが終わり次第、貴方もメンテナンスね？ガイア黒王。」
「

「わかってる。」

机にパソコンを置き、ラルク博士は後ろのメインコンピュータに向かう。ガチャガチャと何かを探し始めた。

「あつた。」

「……痛いんだよな。それ。」

「ガマンガマン！」

コンセント……に似た頭が付いているコードを引っ張って来て、カルマの腕に突き刺した。その瞬間、カルマの体に激痛が走る。ほんの一瞬の出来事は過ぎ去り、息を切らしぐつたりと椅子にもたれる。

「い……てえ……。」

「あーやっぱり。ちょっとガタが来てるねえ。治しとくよ」

「え、あ……はい。」

「痛いからって駄目だよ？嘘ついちゃ！」

「すみません。……イダツ！！イデデデデデッ！！」

胸を押さえてジタバタもかくカルマ。ダークライのガイアは、見て呆れていた。
本来ならこうはならないが、扱いが雑だとカルマのようになる。死にはしない。

「他の子は痛がらないんだよ？無茶苦茶な使い方、してるんじゃないの？」

「博士、それルークにも言ってやって下さ……イッターア！！」

「やれやれ。……はいおしまい！次はオズくんだね。」

「余はもう来ているのだ。」

一同振り向き、入り口の前に立つ声の主を見つめる。そのポケモンはデスカーン。デスカーンはカルマを見て、笑みを浮かべた。

「やあカルマ。ずいぶんと叫んでいたが、大丈夫か？」

「な……なんとかな。今、一人称とか喋り方…違ってなかったか？」

「ん？聞き間違いじゃないかな……。俺はいつも通りだぞ。」

「そうか……。じゃあ博士、また。」

「お大事に」

プラグは抜かれ、カルマは研究所を後にする。

カルマが去ったのをいいことに、デスカーンのオズは口調を戻した。

ふう……。と一息つき、オズは二人と会話する。

「さて……。前から話したかった回想だがな。唯一の王適合者は、余とガイア殿だ。不適合者になってしまった王や民は……。」

「技も特性も失ってしまった。だよね？」

ラルク博士の発言に、オズとガイアは頷く。

不適合者とは、悪魔化せず、技も特性も失ってしまった者達のこと。悪魔の持つ治癒力はあるため、武器を手にも外界で悪魔を研究している。スラムという集落で、自給自足の集団生活。集落にはリーダーが二人いて、階級が上のリーダーが全ての指揮を取る。もう一人のリーダーは、補助をする為にいるようなものだ。

ここからデッドバスターの基地に向けて、悪魔の出現や研究結果が届けられるのだ。

「今まではやたらめったにしていたから……。望んで来てくれた者達には、詫びねばならない。」

「今はディアルガとレシラムが協力してくれている……。不適合者を出さずに此処まで来たのは、余は、彼等のおかげだと思っている。」

「嗚呼。そうだな。にしてもお前、民に化けて活動をするとは考えたな……。私には真似できないぞ?」

「民のダークライはいないからな。デスカーンには民の者もある……。王だと隠すには打ってつけじゃ。」

強く鉄の扉を叩く音がし、一同は扉へ目を向ける。オズは慌てて椅子へ腰掛けた。というか……。立っている。扉を開けて現れたのは、ガイアの部下であるヨノワールだった。

「どうした?またアイツ等か?」

「は……。はいッ!!ズルズキン四人組が、脱走しましたッ!!」

エディミイという町を走る、ズルズキンの四人。悪魔化しているのは、内三人だけ。メンバーを紹介しましょう。先頭にいる、黒いタンクトップにズボンの皮、悪魔の目をしたズルズキン。『ルーク』。最近黒い手袋を履いている。後ろで彼の尻尾を持って走っているのは、不適合者なのにデッドバスターをしている双子の弟。『エール』。白いパーカーがトレードマークだ。

傷付き失明した開かずの左目、胸にザラ紙を巻いた普通の色違い。『シスカ』。

完全に悪魔化しているズルズキン。『イヴィル』。その姿だが……ズルズキンの原型をとどめていない。鶏冠じゃなくて赤い鬘、肌は濃紺。五本指を折らないと地面に付いてしまう、長い腕。首と手首には白くふさふさの毛……。悪魔だから皮は着ていない。以上。ズルズキン男子四人組の紹介でした。

「メンテナンスなんてしゃらくせえッ！！野郎共ーッ！！脱走だ走れー！！！」

感情のままに進むルークを見て、はいはいとシスカは笑う。

「エール疲れた。ルークうー。」

「よしてきたッ！！」

立ち止まり、ルークはお姫様抱っこでエールを運ぶ。

「チョツと待テ。ドコまで走ル気だ？」

奇怪な声でイヴィルが喋る。彼の言葉は、今いる三人にしか理解できない。理由は、またいずれ。

「とりあえず逃げる！！」

「……ヤレヤレ。」

「行くよ、イヴィル。」

走り去るルークを追うシスカとイヴィル。その頃ガイアは、高台からエディミィの町を見つめていた。

右手を町へ向け、目を瞑る。闇を見つめるガイアの目には、無数の白い光が映っていた。ガイアが見ているのは、ポケモン達の魂。これは、彼にしかない特集能力。手をかざしている範囲内の魂を見ることができ、悪魔とポケモンの識別も可能だ。なぜなら、悪魔の場合魂は赤いからだ。

「いたいた……。サクラ、頼む。エディミイ大橋の入り口付近だ。」

「はい。黒王様。」

女性のサーナイトは指示通りに超能力を使う。四人組を此方へ引っ張り込むのだ。十分もしないで、四人組は元の場所へ。ルークは胡座をかいてふてくされている。

「畜生。面倒臭せえ……。」

「黙れルーク。まったく……これで何度目だ？」

「グルルル……。」

「三十五回目だって。」

シスカが代弁。ガイアは呆れ果て、ため息すら出せなかった。

「あとはお前等だけにした……。ルーク、行ってこい！！」

「あいあい……。……。ん？」

ルークの皮を引っ張り、エールは表情で寂しいと訴えた。シスカが近寄り、一緒に待っててあげようか。と微笑む。

「グルルル……。」

「……。わかった。エール待つ。」

惜しむように手放し、ルークを見送るエール。ルークの姿が消えると、赤ん坊のようにグズリ出す。大きな腕でエールを包み込み、

イヴィルは懸命に慰めた。

ルークが毎回脱走するのは、実はエールのため。エールは人見知り
が激しく、かつ臆病で寂しがり。ルークがいないと、不安に押し潰
されそうになるのだ。

「ルーク……。ルークう……。」

「大丈夫。シスカと自分ガイルカラ。一人ジャナイヨ？」

研究所の中、ルークは双子の弟のことをずっと考えていた。ラルク
博士の面談には正直に答えている。

「うわー、直すの大変だなあ……。相変わらず、エールくんの為に
無茶苦茶やってるね。なんで、不適合者のエールくんをデッドバス
ターにしるなんて言ったの？」

「色々あんだよ。アイツは、俺がいなきゃいけないんだ。離ればな
れだったら……。エールは……。」

「……。よし、直すよ？今回はかなりの激痛になるから、覚悟して
ね。」

コンセントに似たプラグと、注射針が付いたコードを取り出して
ルークの腕に。それが終わると、ラルク博士はコンピュータに向か
う。修正プログラムを起動させた。

「二時間はかかるからね？」

「了解……。……うっ！！アアアアアッ！！」

ゾロアークのカルマが受けたものより強い痛み。必死に耐えるル
ークだが、我慢できず悲鳴を上げていた。

この様子を見つめながら、ガイア黒王は過去の回想をしていた。そ
れは、まだデッドバスターが生まれる前の……。ディアルガとレシ
ラムに出会うまでの記憶。

T o b e N e x t

序章前編：始マリノ刻（後書き）

【次回予告】

ガイア黒王

「真実の神レシラム、時の神ディアルガ。
彼等が無事、下界に来ていなかったら……我々は終わっていた。

今回は、今の状況になった理由を話そう。」

序章後編：全ての原点

回想

千年以上も昔、悪魔は突然現れた。強いポケモンを本能的に探し当て、片っ端から食い荒らす。惨劇は止むこと無く、悪魔を恐れたポケモン達は、地下都市を築き上げ地底で暮らし始める。以来、外へ出たことが無かった。デッドバスターが生まれるまでは。

数年前

地下都市で暮らし始め、千年が経つ……。悪魔に怯える暮らしを続けているポケモン達……。恐怖からのストレスに耐えきれずバタバタと死んでいった。これを聞き、世界各国の代表ポケモンが中央広場に集い始める。緊急集会が行われた。

南地区代表：リザードン

北地区代表：エンペルト

西地区代表：ドレディア

東地区代表二名：ドサイドンとケンホロウ（ ）

悪魔と戦った経験者：ダークライとミュウツー

部下に見守られながら、代表達は悩み苦しんだ。どうすればいい
…と。

「セルフイオ王、ミュウツリーの貴方が勝てなかったと父上から聞いています。誠でしょうか？」

リザードンが、ミュウツリーに恐る恐る聞いてみる。ミュウツリーは目を瞑り、静かに頷いた。

「申し訳ない……。ダークライと手を組んでいても尚、勝気は無かった。あれから千年か……。このままでは、悪魔は地下都市にくるであろうな。」

これを聞き、部下達が騒然とする。ドレディアは二人に向けて叫ぶ。

「二大勢力と恐れられた、最強の間と言われしお二人が勝てなかったのですか?!」

今度はダークライが言う。

「嗚呼。この通り痛手を負ってきたよ。」

ダークライの右腕には包帯。肘まで続く包帯を外すと、木製の義手が姿を現した。銀のネジで固定されていて、痛々しく見える。

身を震わせ、ドサイドンは「無理だ」と呟く。この言葉に怒り、リザードンが拳を作ってドサイドンに殴りかかるようにする。

「デメエーッ!!!」

「待て、ガジェット。」

「!.....イブキ。」

リザードンを止めたエンペルトは、冷静にこつ切り出す。

「神に頼る他ないな……。」

また、辺りが騒然とする。存在がわからないモノにすぎる気が？
！と、ドサイドンは怒鳴った。

「いるだろう？」

「神話になッ！！実在しない存在に追いつがるより、我々でなんとかするのが正しいはずだッ！！それともイブキ……。貴様、神を見たことがあるのか？」

全ての視線がエンペルトに向けられる。表情一つ変えず、「夢に見た」と一言。ドサイドンは何も言わなかった。

この世界で、世界創造の神として語り継がれているポケモンは、二十以上存在する。一口に神といっても、民と共に世界を見守る……。いわば管理人のようなものがほとんど。彼等は【神の代行】と呼ばれている。

実在がはっきりと確認されていない特別な存在……。それが、彼等がいう【神】だ。エンペルトは、その中の一人に出会ったという。

「神話では確か、強き思いを抱く者にもみ姿を現すとあったな。夢

と言う形ではな……。信じられんな。」

「フン……。これだからドサイドンは嫌いだ。頭が堅い。」

「なんだと?!」

「喧しいぞ。」

ダークライに止められ、ドサイドンは静かになった。足元を見て、不服な表情をしている。

「今は作戦会議中だ。喧嘩や関係の無い会話は控えるんだ。……で？イブキ、その神は？」

「時を司りし者……ディアルガ。」

「……。それはまた、大層なお相手だな。話しを戻すぞ？議題は、悪魔討伐の作戦。エンペルト、イブキの提案はディアルガに頼むと……。だが、どうやってだ？」

「騙されたと思って、時の帳に行くというのは？」

エンペルト、イブキはそう提案するが……。場所がわからない。皆はまた悩み苦しむ。そんな中、何処からか声が。

「これを使うのはどうかな？」

「「?!」「」

「何奴ッ!?!」

「そう警戒するな、ミュウツীর王。余だ。デスカーンのオズだよ。」

時計台へ視線が集まる。楽しげな表情で、デスカーンが鉄のタルを持ってこちらを見つめている。彼の頭の上に、ランクルスというポケモンがしがみついていた。

「降りて来たらどうだ？」

ダークライが言う。ゆっくりとこちらに向かって降りるデスカーン、オズ。

場所を開けてやり、一同デスカーンの言い分を聞いてみることに。

「よいしょ。」

ゴトン

「久しいな。諸君。」

「挨拶はいい……。オズ、それはなんなんだ？」

半場呆れているダークライ。腕を組んでタルを見つめる。真剣な表情に変わり、オズはためらい無く回答。中には、悪魔の血液が入っていると告げた。ダークライとミュウツーを除いて、一同は大パニック。

「そッ！！そそそんな物騒なモン何に使っんだよ?!」

「そつよ!」

「詳しく聞かせてもらおうか?」

リザードンとドレディアの話しを押し退け、ミュウツーは言う。
ニヤリと笑うその笑みは、悪役のよう。

「おお恐い。……さて。余が言いたいののは、彼が説明してくれるぞ。
ランクルスのラルク博士だ。」

オズの頭から降り、タルの上に立つランクルス。場違いの明るい
雰囲気の際は、王達の前に関わらずほぼため口。緊張もせずスラス
ラ会話をしていく。

「オズ陛下に悪魔の研究を頼まれましたね? 殿下と外界に出て、コ
チヲを採取したのさ 悪魔はポケモンを食べて成長する生き物で、
その強さは無限に上がり続ける。つまり、化物ってことだね。悪魔
にもタイプがあって、攻撃、防御、スピードの三つがある。ポケモ
ンみたいに複数持っていたりするのは無いけど、こっちに帰るの苦労

したよ？そんな化物に対抗するには……？逆に我々ポケモンも、悪魔の力を付けるしかない！！ということで、策を考えました。」

「目には目を、歯には歯を……。というだろうか？余はもう試した。セルフィオ帝王、最大でバリアを張ってくれないか？余が成果を發表しよう。」

「何？最強のこの私を、越えているとでも？まあいいだろう……。」

嘲笑い、ミュウツーは言われた通りにした。王や部下達は後ろを避け、彼等の左右に着いた。

深呼吸し、オズは集中力を高める。構えて、影の手全てをミュウツーに向けて。余裕の表情をするミュウツーだが、オズは勝てるかと確信していた。

赤黒い炎を手に纏い、手を全て中央へ。ポケモン技では無い、炎の光線を発射した。

刹那、ミュウツーの顔色が変わった。背筋に冷たいモノが走り、完璧な防御姿勢を取ろうとするが、もう遅い。

ドオオオオン！！

「「ヴィヴァーチェ王ツ!!」」

ミュウツの部下達が走る。煙が晴れると、壁に叩きつけられ瀕死寸前のミュウツが……。

「ぐ……うう……。」

「この通り、パワーは悪魔そのものだ。」

「なるほど……な。フフフ……。良い成果だ。オズ。」

「ズタボロの貴方を見るとは思わなかったのだ。」

ニヤニヤ笑いながら、オズはオレンの実を投げ渡した。

収穫はそれだけでは無い。オズは一同に向けて言う。「今度はなんだ？」とダークライ。腕を組んで気だるそうな目をしている。

「時の帳が光っていた。」

「「ええ?!」」

「お前見つけたのか?!」

「かっかっかっか!地上に残されてしまったポケモン達が、悪魔に食われる様を天界からしっかりと見ていたみたいだぞ?神々は、やっ
と味方に着いたのだよ。……千年待った。千年もツ!!余の叔父上
が言っていた奇跡が、今ツ!!起きたのだ!!」

「んん。興奮してるところ悪いが、悪魔化するにはどうすれば
いいんだ?」

咳払いの後で、ダークライはオズに聞いた。

「簡単だ。悪魔の血液を飲めばいい。ただしな、身体に馴染むまで
かかるぞ?余は一ヶ月くらいだったかな?」

「無事に時の帳に辿り着くには、悪魔化するしか!!」

「だな!!」

「では、開けますね。」

ラルク博士は、バルブをひねってタルの蓋を開ける。蓋はゆつくりと持ち上げられ、中から大量の鮮血が現れた。石のコップに鮮血を汲み、オズは王達に手渡す。意見一致したものの、王達は抵抗の表情を浮かべている。その中で二人、ためらわず飲み干したポケモンが……。

「ガイア黒王、セルフィオ帝王……。決意が早いお二人じゃな。」

「フン……。このセルフィオが遅れを取るものか。悪魔からポケモン達を守る……。王として当然のことよ。」

この言葉を聞き、王達は次々と鮮血を飲み干していく。噎せかえる他の王達をよそに、ガイアはセルフィオを横目で見つめ言った。

「元・恐怖政治をした独裁者が、何を言っかと思えばそれか。」

「なんだと？」

「言ったままの………うッ！ッ！」

胸を押さえ、ガイアは崩れ落ちた。ミュウツー、セルフィオに抱えられたガイアの体は、四十度を超える熱を出していた。熱と激痛に耐えるどころか、ガイアは気を失ってしまった。呼吸はしている。

「ガイア……！！ガイアッ！！！」

「セルフィオ帝王、大丈夫。しかし何故だ？ガイア殿だけが余と同じ症状を……。博士、調べてくれんかな？」

ガイアはオズの宮殿に運ばれ、完全に悪魔化するまでオズに見守られた。その間王達は、ラルク博士の研究所で血液検査を受けることに。すると、不適合だったと告げられる。

「なんだと?!」

「セルフィオ帝王、そう怒鳴らないでくださいな！えっとねえ……。」

どつやら、全員が必ず悪魔化する訳じゃないみたいなんです。お気を悪くさせるようですが、技と特性が全て無くなっていました。」

頼みの悪魔化は出来ず、王達は落胆。二人だけに任せるしかないのかと、ケンホロウは嘆く。

「私は諦めんぞ…!!」

セルフィオは研究所を去ろうと扉へ向かう。ラルク博士に止められ、立ち止まった。

「セルフィオ帝王！いくらミュウツリーの化学力でも、こればかりは無理ですよ!!」

「ガイアは私に教えてくれたのだ……。本当の幸せを、本当の生き方をッ!! あいつだけに良い格好はさせないッ!!」

言って、セルフィオはいなくなった。

「やれやれ。仲が良いのか悪いのか……。」

ケンホロウは苦笑いで扉を見つめる。

「ライバルってやつですわね？……あの、これを利用すれば、悪魔を倒す戦士を作れるのではないでしょうが。」

ドレディアの提案。それは良い判断だと、ケンホロウは賛成。

「各地に、悪魔を倒そうと意気込んでいる集団がいるんだ！！彼等に頼めば、私達の代わりに戦ってくれるはずだッ！！」

「けど、適合者が出るのは奇跡でしかないぞ？オズ陛下とガイア黒王はたまたま当たっただけさ。」

ラルク博士は乗り気じゃない様子。王達を止めはしなかったが、結果はこの通り。

千、二千……。男女問わず、王の呼びかけで自ら現れたのはこれだけ。本当ならもつといるはずなのだが……。

「……どうだ？イブキ、ガジェット。」

「……いたッ！！が……少なすぎる。」

これだけ集まってたった四人しか適合者が出なかった。しかも子どもども。

混乱するポケモン達を宥めようと、必死に呼びかける。しかし、野次や罵声が治まることはない。そんな時……あの声が。

咎めてはいけません。

静まりかえるポケモン達。天井を見上げ、無意識に声の主を探している。

彼等は、私に従って動いただけ……。今苦しんでいる子ども達は、神に選ばれし勇者。今は、試練を受けているところ……。

「貴方は誰だ！！名を聞かせて下さいッ！！」

エンペルトが、声の主に向けて叫ぶ。優しい温もりを持つその声は、ポケモン達に衝撃を与える。

私は、白き混沌……。真実の大いなる龍、レシラム。

「レシラム……！！」

二人の王と、その子達を時の帳へ向かわせるのです。私は、そこでディアルガと待っています。

声が消え、子ども達は親に決意を伝えていた。

「ボク、神に選ばれたんだね。パパやママを守るから、心配しないでね。」

「父ちゃん、俺、もう甘ったれたりしないから……!!だから、だから……!!」

「わかった!もう何も言うな……!!頑張れ!!」

空気の変わりように、不適合者だった王達は啞然としている。神の登場で、こんなにも変わるものなのだろうか。いや、神だからこそその効果なのか……。

「待たせたな。」

「……セルフィオ帝王。やっぱり駄目でしたのね。」

赤い目、黄色く鋭い瞳。悪魔の目をしたミュウツー、セルフィオ帝王が姿を現した。無理矢理悪魔化することに成功したように見えるが、失敗したのだ。残念そうなオーラを纏っている。何故か首に赤いスカーフを巻いていた。

「目が変わっただけで、何も変わっちゃいない。ただな、良いモノを開発した。」

「良いモノ？」

「嗚呼。試作品はガイアに使ってもらおう予定だ。無論、私も使うぞ？」

笑い、スカーフをめくりあるモノを見せる。ひし形の、黄緑色した石だった。実はこれ、後の寄生兵器になる原型。ラルク博士とセルフィオ帝王が協力し、改良に改良を重ねて寄生兵器が誕生した。

一ヶ月後

ダークライ、ガイア黒王の右腕に変化があった。五本指の、悪魔の腕になっていたのだ。皮膚は濃紺で、赤く鋭い爪が恐怖を呼び覚ます。最初に紹介したズルズキン、イヴィルとは違って長さは変わってない様子。

「これは……！……！」

「悪魔化、できたぞ。」

中央広場には、あの王達と適合者の子ども達。そして、ガイア黒王とオズ陛下の姿がある。いよいよ、悪魔のいる外界へ行くのだ。

「時の帳があるのは、かつて火の国があつたアルランダ地方だな……。セルフィオ、サポーターは任せたからな?!」

「最小限の超能力しか使えなくなったが、力になるうぞ。っと、その前にガイア……。これを。」

「ん?」

あのひし形の石を投げ渡し、セルフィオ帝王は何処かに埋め込むように指示。

「試作品の兵器だ。使ってくれ。」

「実験は？」

「私もするから安心しろ。ほら。」

「……そういうことか。」

悪魔の手の甲を切り裂き、傷口に石を無理矢理押し込むガイア。激痛が襲いかかったのは、言うまでもない。血に染まった右手の傷口は直ぐ塞がり、石と皮膚が一体化した。

「ハア……。ハア……。」

「スゲー。」

黒銀のゾロアが小声で言った。立ち上がり、ガイアは全員に向けてこう言った。まだ苦しそうに息を荒げている。

「此処までトントン拍子に進んで来たが、もうこんな奇跡は無いぞ？！ここから先は、何が起きるか予測不可能だッ！！今日より我々

は、悪魔から世界を守る使徒……デッドバスターとして生きることになる！！後戻りは出来ない！！進むのだッ！！」

「オオーッ！！」

「我に続けッ！！選ばれし勇者達よッ！！」

現在

そして、無事に時の帳に辿り着き……。ディアルガとレシラムに出会う。

彼等の住む天界も、悪魔に侵略を受けたらしい。創造者にして母である、アルセウス。そして、兄弟である他の神々がマザーコアに連れ去られてしまった。逃げ延びたディアルガとレシラムは、長い年月をかけて下界へ降り、彼等を導いたのだ。

いくら万能の神でも、悪魔には敵わなかった。そんな相手に、我々デッドバスターは戦いを挑んでいるのだな。

メンテナンスが終わり、ぐったりしているルークを見つめながら、
ガイアは心中で呟く。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン

……

「エールだな。」

苦笑いし、ガイアは扉を開ける。オレンジの十字架が模された白い盾を持ち、エールは盾で扉を叩いていた。暴走しないようにと、
イヴィルがエールのパーカーを掴んでいる。

40

「ルークは?!」

「大丈夫。いるよ。今プラグを外すから、待っててくれ。」

ガイアの言葉を聞き、エールは笑顔になる。

ヨタついて立ち上がるルーク。急いでエールの元へ向かい、抱きし

めた。イヴィルは、パーカーから手を離す。

「心配かけたな。エール。」

「ルーク！」

頼ずりするエールを見つめ、ガイアはまた過去を思い出す。

回想

「よくぞ、此処まで来てくれた。」

「待ってましたよ。皆さん。」

巨大な蒼龍シロリウネと白龍シロリウネ。ディアルガとレシラムだ。

「エンペルトから聞いたのである。あの時はフォローしてくれて助かったのだ。余が代わりにお礼を言うのである。」

「いえいえ。実は、我々も悪魔の襲撃を受けて……。何とか逃げ延びて来たところなの。」

「「ええ?!」」

「悪魔の血を使った技術は、もう会得しているな?私とレシラムの力で、血に適合したポケモンを探し出す手伝いがしたい。あと、小さな力だが加護を……。加護を受ければ、ある程度力がますはずだ。」

「悪魔が下界にいるせいで、我々にとって有毒な瘴気が世界に充満している。余り外へは出られないから、これくらいしか協力できない。」

「ディアルガが言うには、悪魔の血を飲んでいれば適合者でも不適合者でも外界で活動可能らしい。普通のポケモンだと、瘴気にやられてすぐ疲れてしまうようだ。そして、神にとっては有毒ガス。」

「連れ去られてしまった、ゼクロムお兄様やパルキア兄様が心配だ」

わ。お母様も、無事かどうか……。死んでしまっていたら、どうす
れば……。！！」

レシラムはうつ向き、涙を流す。ニカッと笑ったオズは、レシラ
ムに言う。

「余と仲間達で、必ずアルセウス様達を助け出すのだ！だから、泣
かないで欲しいのだ。」

「ありがとうございます。私達も、できるだけ協力しますわ。さあ、今日はも
うお開きにしましょう。そろそろ日が沈みます。悪魔が活発に動く
前に――」

頷き、神々を背に走り去る。そんな時……。

「ストップ！」

ガイアは一同を止めた。茂みに何かいると言い、掻き分けて行く。
すると奥から、衰弱しているズルズキンが四人現れた。不思議なこ

とに、内一人は悪魔化している。三人を守るように腕を伸ばしていた。

「……まだ、外界で生き延びている奴等がいたのか。」

……そう。この四人こそが、ズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴィルなのだ。
次回、ついに物語が始まる!!

T o b e N e x t

序章後編：全ての原点（後書き）

【次回予告】

レシラム

「デッドバスター、ズルズキン四人組はいつも一緒。けれど、何かシスカだけが任務に呼ばれてバラバラに……。」

さあ、物語始まったの最初の任務です。

次回も

希望の光がありますように。」

?: 四人組と悪魔

いつも一緒のズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴイル。ルークとエールは双子の兄弟だけど、シスカとイヴイルは義兄弟。どうやって出会い、どうやって仲間になったのか……。彼等の日常を見ていきましょう。

「ZZZZ……。」

「朝ー！起きろー！」

団子状態で眠る四人組。エールはルークの腕枕で寝ていた。手加減無しでルークの背中をビシバシ叩くエール。ルークは一気に現実へ引き戻された。

「ん？朝か……。」

「おはよー。」

起き上がり、ルークは残り二人を叩き起こす。猫みたいな背伸び

をするイヴィル。立ち上がり、木箱の上の携帯電話（通信機）を見つめる。ライトが赤く点滅していた。

「黒王様かラのだ。」

「昨日は昨日、今日は今日で、一体何なんだよ？」

面倒臭そうに通信機を受け取り、ルークはメッセージ機能を動かし内容を確認。三人がメッセージを聞いている傍らで、エールはルークの尻尾を抱いていた。

「おはよう。デッドバスター諸君。前回から話していた、デッドバスターの候補生から戦士が生まれた。みんなに紹介したい。並びに上級悪魔出現の際に備え緊急訓練を執り行う！全員、基地に集まってくれ。以上だ。」

これを聞き、「おっせえんだよッ！！」とルークが怒鳴る。通信機を地面へ投げつけるふりをして、静かに懐へ入れた。

「飯歩きながら食うぞ？なんか木の实持ってけ。」

「はい。」

ということで、四人組は橋を渡りながら朝御飯。橋に集合しつつあるデッドバスター達には、寝坊したのかと茶化され続けた。

「ほっとけ。」

「いい加減直せよな?!」

「コネで戦士になった奴等に注意したって無駄無駄! あははははは!」

「……。」

ルークは心中、闇に満ちた言動を吐き捨てていた。橋に近い場所に住処があるが、エールが尻尾を抱いているから歩くのが遅くなる。これを考慮しての行動であるが、周りから見たら寝坊にしか見えな
い。野次は承知で、四人組はこうしているのだ。

「コネ……か。一応、適合者なんだけどね。僕達。」

「まあネ。シスカが特に悪魔化して（変わって）ないから……カナ。」

「ルークとイヴィルは、最初からそうだったからいいんだよ。僕は後からだ。きつと、失明した左目が悪魔化したんだろうさ……。余り変わらないのはそのせいだよ。」

明るく笑い飛ばすシスカは、何処か寂しそうな感じがする。

前回、序章後編では一人だけ悪魔化していると話しましたね？実は、二人だったのです。保護され、目覚めたルークの目は悪魔の目だった。眠っていたから、ガイアは気づかなかったのだ。

因みに、デッドバスターのポケモンは共通で目が悪魔化。よって、目で直ぐに見分けられるという訳だ。あとの変化には個人差がある。目に関しては、シスカとガイア黒王、オズは例外。

そうこうしている内に基地へ到着。

西地区にだけ存在する、第五ブース。そこにたたずむ赤煉瓦の館がそれだ。十七番目の国、龍の国の王カイリユーが統治するブースでもある。

十七人しかいなかったエリートに、更に三十人のエリートが加わることになったらしい。これで、悪魔に対抗するだけの力がまた増えた訳だ。

ん？三十人の中に、変わったポケモンが潜んでいる。小さな小さな妖精のようなポケモン。Vの字の耳がチャームポイントだ。

「以上が、新たな仲間だ。みんな、共に頑張って行こう！」

「はい！！！」

「それと、上級悪魔についてだ……。昨日、チームZKLザクルのリーダー、ゾロアークのカルマが上級悪魔と遭遇した。民の救出には成功したが……。奴等の力は生半可なモノではない。上級悪魔については、彼女から詳しく教えてもらうことにする。ビクティニのミラ姫だ。」

三十人の中に紛れ込んでいたポケモンは、ビクティニ。ガイアの前まで、お尻の羽で愛らしく飛んで移動。一礼してから話し始めた。

「デッドバスターの皆さん、おはようございます。ビクティニのミ

ラです。私達、無事に逃れて来た神々の代行が……アンダー研究所で悪魔の研究をしているのは、ご存知ですね？今回は、上級悪魔についての研究報告をします。

上級悪魔は、レシラム様のような大型の悪魔。その力は、神々に等しいモノです。レベル一〇〇のポケモンが何十人と集まっても、勝目はありません。ですが、私達神々の代行が祈りを捧げれば……。勝敗は五分と五分に。あとは、貴方達にかかっています。今現在、祈りを捧げる場所……【教会】という施設を建設中です。それが完成するまでは、任務中に上級悪魔と遭遇しても戦わないで、逃げて下さい。プライドに反するかもしれませんが、退くことも勇気です。どうかお願い致します。」

「……以上だ。みんな！！新入りと訓練所へ向かってくれ！！私は四人組と話してから行く。」

「「?!」」

冷たい視線が、四人組を見下ろしている。エール除く三人は驚き、互いの顔を見渡す。

皆が去ってから、ラルク博士の研究所へ呼び出され二人に着いて行く。恐る恐る中へ入り、待ち構えていたラルク博士とオズを見据えた。

資料や機械だらけ、モニターやコードだらけの空間。優しい笑みを浮かべたオズは、四人組に挨拶。

「やあ。ズキン四人組さん。」

「あれ？オズ、なんで君も？てゆうかいつの間に?!」

「ああ、彼もなんだよ。ね？黒王様。」

ラルク博士は、すかさずオズをフォロー。黒王ガイアは、そうだと頷く。本当の理由は……四人組の話が終わった後で。

四人組が呼び出された訳だが、主にルークとイヴィルに用がある。最初から悪魔化していたという彼等は、いつどうやって悪魔の血を得たのか……。月一尋問を受けるのだが、彼等の答えはこうだ。

「知らねえよ!?!いつの間にかこうだったんだ。イヴィルだって、なあ?!」

「ゲルルル。」

「戦闘した試しは？」

「わからんつての。いつまで尋問する気だ？何年間も質問責めはキツイぜ……。」

「マザーコアのスパイという噂もある。お前達二人は、要注意人物なんだ。」

「なんだよスパイつて……。じゃあ俺達を助けなきゃよかつたじゃねえかッ！！」

「まあまあまあ、ストップストップ。落ち着いて。黒王様、ここは俺が……。」

オズが割って入り、冷静に対応。

「なあ、ルーク。俺から聞いていいか？一応、みんなを説得する役があるからさ。内容は同じだろうが、今一度聞きたいんだ。でなきや、周りのデッドバスターは納得しないだろうし……。マザーのスパイだなんて、俺は思いたくない。」

「……。わかつたよ。」

「ありがとう。」

なんとか丸め込み、オズはほっと一息。いつもより穏やかな笑みを浮かべた。

四人の尋問官に、ルークは詳しく説明。いつもの内容を話した。

ルークとエールは、物心ついた時からずっと二人きり。アンダーワールドだなんて知らなかった。そんな時代……。

「荒れ果てた大地……。枯れ木の森を渡りながら、俺達はただただ歩いてきた。俺が悪魔化していたのは、その時からだ。悪魔に襲われているシスルを助けて、一人さ迷うイヴィルと戦い……。今の状態に至るって訳さ。」

「イヴィルは最初から？」

「嗚呼。この姿で出会った。」

そうか。そう言って、オズは引き下がる。

「ありがとうな。」

「話しはそれだけじゃありませんわ。」

ビクティニの姫、ミラは五人を見渡し言った。絶対に無謀な挑戦をしないでくれと。

「貴方達は、幾多の逆境を無理矢理乗り越えて来たと聞いています。あと、黒王も。」

「うぐつ。わ…私は…えつと…。」

「貴方達には、強く念を押しておきます!!上級悪魔を倒す手掛かりはありません。私達が祈り、直接、ディアルガ様とレシラム様を手助けし…加護を増幅するしか無いのです。だから、任務中に出くわしたら逃げて下さいッ!!いいですね?!!」

「「は…はい。」」

「わかればいいのです。」

ビクティニの小さな体から放たれた気迫に、四人組も二人の王もたじたじ。本当に無茶しないですよ？と、ラルク博士は彼等に言う。

「よ……よし。次に、四人組には悪魔の階級について学んでもらおうか。博士。」

悪魔については、本来なら訓練施設で学ぶもの。四人組はまだ知識不足で、黒王が時間のある日に勉強をするのだ。

「悪魔には三つのタイプがある……。これは以前話したな？複数のタイプを持っていたりはない。しかし、ポケモンを喰っているが故にタイプエネルギーが蓄積している。これは、最近の研究でわかった事だ。」

「つまり、ポケモンと同じような弱点があるんですね！」

「シスカ、正解だ。けれど、それは上級悪魔だけの話し……。悪魔には階級がある。初級、中級、そして、今回新たに現れた上級悪魔。階級が上がるに連れて、レベルの上限が変わってくる。我々が使う技には限界があるが、寄生兵器に技タイプエネルギーを注ぎ入れれば、より強力な技を発動できる。」

「上限はだいたいどれくらいなんだ？」

「初級は、三〇〇〜約九〇〇程度。中級は、約一〇〇〇〜約一五〇〇。それ以上が上級。中には、二〇〇〇を超えるレベルの悪魔だっているだろう……。」

ガイアは自分が言ったことをおぞましく思った。これが悪魔。無限に成長するのだと、彼は改めて知った。オズも、ラルク博士も、四人組もだ。

「カルマが出会った上級悪魔は、ケルベロス。岩の体を持つ悪魔だったらしい。」

「超小型通信機で、彼が写メってきた映像があるよー。」

メインコンピュータに向かい、ラルク博士は映像をモニターに移す。ケルベロスは、岩の狼。尾は三匹の大蛇だった。大蛇は岩の体ではなかったのが、ガイア黒王は気掛かりらしい。

「上級悪魔については、まだ研究しはじめたばかりだ……。もしかしたら、悪魔としてのタイプは一つだけでも、蓄積したタイプエネルギーは複数所有しているかもしれない。そうになると、戦いはより困難なものになる。……ルーク。」

「おう。」

「私もだが、絶対無茶はするな?! エールは、お前がいなくてはならないんだろ? 絶対に死に行くような真似はするな!! わかったな?」

「言われなくてもわかってるさ。エールは一人にさせない。ずっと一緒さ。な? エール。」

ルークが振り返ると、エールは尻尾を抱いて頬擦りしていた。赤ん坊のようなエールを見て、ルークは微笑む。

やれやれだな。と、オズは早々と外へ。ガイアに止められると、散歩したらまた来ます。と言っていなくなった。

「気まぐれ屋め……。」

「四人組、今日はもう訓練に行きなよ。黒王は、まだ僕達と話があるからあとから。ね？」

「嗚呼。先に行つてくれ。」

一礼して、四人組は研究所をあとにする。研究所の外では、物陰に隠れて四人組が去るのを待っていたオズが。一息ついてから、中へ入った。

「ふう。」

「こつちの台詞だ。さて……。ここから先は極秘会議だな。ちょうど、セルフィオが回線に入り込んで来たようだからな。」

黒王ガイアは、『M?』と表示されている一つのモニターを指差す。モニターから、男性の笑い声がした。

「流石だな！機械でもさっそうと気づくだなんて……。」

「私は耳が良いからな。ちょっとした音でわかるんだよ。……それより話したな。」

三人の王とラルク博士、ミラ姫の極秘会話が始まった。内容は、神々の代行についてだ。

神々の代行……。それは、文字通り神々の代わりに働くポケモン達のこと。神の数より多く存在し、各地で民と暮らし、常にみんなの心の支えとなっていた。災害があれば駆けつけ、暮らしが困難なら知恵を与える。時には自分達の力を使って、みんなを助ける。それが仕事。

今は、悪魔の魔の手からポケモン達を守るのが仕事だ。代行の半数は、まだ外界で取り残されたポケモン達の救助活動をしている。デッドバスターへ完全に引き継ぎをするのでなく、代行は代行なりにデッドバスター達の手伝いをしているのだ。

「みんな、危険は承知。もしものことがあつたら、通信石を壊すように言ってますから。」

「え?!壊しちゃうの?」

「そうすれば、代行全てのクリスタルが赤く輝きます。それで判断するんです。ラルク博士。」

「はいはい。」

「早速ですが、外界の代行達からの救難信号があつた場所をモニターに……。」

「了解。」

セルフイオがハッキングしたモニター以外、モニター一つ一つでパズルのように巨大な地図を作る。この大陸は、アスナロ地方。かつて火の国があつた場所だ。

「赤い丸印がある場所から、救難信号があつたんだ。つまり、クリスタルを壊したってこと。」

送り主は二人。ランドロス陸神様と、鋼の賢者コバルオン。ミラ姫、理由は？」

手持ちのパソコンを開き、博士はミラ姫の話しをメモ。片手タイピングなのに凄いスピードだ。

「ランドロスは、悪魔に祠を壊されて脱出不可能になったそうです。コバルオンは……私達ではわかりません。何があったのでしょうか……。」

「姫、コバルオンは代行なのですか？」

「違います。セルフィオさん。彼は神帝様の木を守る賢者。聖なる木、と言えばわかりますね？」

聖なる木。それは、アルセウスの木とも言われている光色の神木のこと。世界各地にあり、悪魔はこの木の光を苦手としている。それゆえ、現在は避難所とされている。本当の存在意味は、誰も知らない。

「賢者は、代行と民が着くまでここを守るのが仕事。なのですが……彼に渡したクリスタルが壊れたということは、悪魔が……。」

「何はともあれ、私達の出番だ。オズ、今回はお前も来い。」

「わかったである。」

団結する二人に、ヘルプが来るまで、また研究をしているか……。と、セルフィオは去る。

彼は不適合者。でも、寄生兵器を生み出した第一人者としてデッドバスターをしている。肩書きだけで、普段は自室の研究室に籠りっぱなしだが。

「また物騒なモノを作ってるであるかな？セルフィオ。」

「知るか……。他のデッドバスターには話せない極秘任務だ。夜に出發しよう。」

「了解なのだ。では、余は基地の訓練所へ向かう。早くしなきゃ皆が不満に思うからな。」

にかっ！と笑い、オズは早々と去った。一息ついたガイアは、ラ

ルク博士から回覧板をもらつ。回覧板には、名簿が貼つてある。今は十七人しかいないが……。これを使って、今日の任務にあたるデッドバスターを選ぶのだ。

今日の任務は、シエリア地方エリア二。水の都と言われている国だ。

「……。シスカとミズキにしよう。あの二人なら、多少の危険も切り抜けてくれる。博士、早速呼んで下さい。」

「はいはい」

本線基地・訓練所

ルークは、エールと兵器を使う練習中。せめて、ルーク達を守るようにと黒王から言われている。柔道の試合で見かける床を使って、二人は組み手を続けた。

「ちゃんと盾を顔まで上げて!!!危ないぞ?!」

「うん……うん。」

ピンポンパンポン

『お呼び出しをしま〜す！チーム悪党のシスカく〜ん。チーム泉のミズキちゃ〜ん。出番ですよ〜 僕の研究所まできつてねえ〜』

陽気なコールが訓練所に響き渡る。デッドバスター達は、思わず苦笑い。訓練しながら聞いていた者は、笑いを耐えるために皆が立ち止まった。ちょうど、シスカとミズキは激しく戦っていた。

「ストップ。……呼び出し。」

「そうね。行きましようか。独眼のズルズキンさん。」

「フフ。」

険悪なムードなのに、シスカは笑った。急いで研究所まで向かう

二人は、スピードで張り合っていた。

「ついた。ワタクシの勝ちですわね……。」

「みただね。」

中へ入ると、いつもの出迎え。ラルク博士の呑気ぶりは、場違い過ぎていつも対応に困る。他のデッドバスター達だってそうだ。

「黒王様、お待たせしました。水の国の姫、ミズキ。ただいま着きましてよ。」

「口調が母に似てきたな……ミズキ。ビアン王女は元気か？」

「ええ。今回の任務はなんですか？」

「今回はシエリアへ行ってもらおう。任務は、スワンの森にある【海の宝玉】を悪魔から取り返すことだ。」

「宝玉を飲み込んだじゃったんだってー。で、宝玉を飲み込んだ悪魔は中級階級。群れのリーダーだね。未だ暴走を続けているから……ダンジョンの悪魔達も凄く凶暴だよ。気をつけてね。」

「はい!!」

ラルク博士はメインコンピュータに向かう。ぽちつとボタンを押して、部屋の右壁にある鉄の扉を開けた。中には、白く光るモンスターボール型の台。ドサイドン二人分の大きさをしているため、かなり巨大だ。

「二人共々、予め武器を出してね。」

まだ寄生兵器を出していない二人は、左胸に手を当てる。黄緑色に光輝く胸から手を離すと、粒子が手元に集まってきた。ミズキは粒子を体に纏って武器化。シスカは、手元にある状態で武器化させた。

「悪のレイピア。装備完了。」

「水の羽衣。装備完了ですわ。」

「よし……。行き先、座標J三〇七。シェリア地方エリア二の集落。デッドバスター、転・送っ！！」

手持ちパソコンのエンターキーを押して、機械を動かす。まばゆい光りに包まれて、二人はあつという間に集落に着く。赤い布で出来た、大きなテントの中だった。

「さて……。このリーダーに会いましょう。ワタクシの足で惑いにはならないで下さいね？シスカさん。」

「足で惑い？大丈夫。ならないよ。たぶんね。」

デッドバスター基地
オペレーションルーム

巨大なモニターの前には、大学にありそうな席。全部で十段のこの席には、パソコンに向う百人のポケモン達。みんなエスパーパータイプ。

ここで、任務中のデッドバスター達の位置やステータスを管理。悪魔^{ゲット}の確認をすることも可能だ。
この指揮官は、セルフィオ帝王。任務がある日はここで仕事をしている。一人、ど真ん中の席で巨大モニターを見つめていた。

鬼が出るか蛇が出るか……。藍色の玉は無事か……。さて、レシラムとディアルガにコンタクを取るかな。

かくして、最初のミッションがスタートするのだった。次回、シスカとミズキの活躍にご期待下さい。

T o b e N e x t

？：四人組と悪魔（後書き）

【次回予告】

レシラム

「悪魔に立ち向かう、デッドバスターのポケモン達……」。

私達はただ、彼等を見守ることしかできない。無慈悲だとわかっていても。

次回も祈りましょう。

愛しい子等に、希望の光を。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5940y/>

ポケモンTHEクロニクル

2011年12月21日00時00分発行